

学習指導要領に準拠するICTプロフィシエンシー検定を 利用した授業実践報告とその展望に関する考察

愛知県立瀬戸北総合高等学校 田中 健、 ICTプロフィシエンシー検定協会 足立大樹

発表者の勤務校で開講されている学校設定科目『情報実務』において、普通教科「情報」学習指導要領の内容に約80%準拠するICTプロフィシエンシー検定(以降、P検)を導入した授業実践の報告と、近く予定されている高大接続に向けた展望の考察である。授業実践においては進路指導や年間行事計画に鑑み、生徒の進路実現に効果的で、学校運営上無理のない導入事例とすること、また、教科情報の専任ではない教員にも実践しやすい実践例・計画例となるよう心掛けた。

1. はじめに

本発表では本年度で開校33年目、総合学科に改編されて8年目となる愛知県立瀬戸北総合高等学校において、情報科目の授業内にP検を導入した実践例を報告したい。また、その実践結果から考えられる今後の展望について考えてみたい。

2. 授業実践の背景

本実践、発表を行なうに至った背景は、主に以下の2点である。

2.1 パソコン教室の代替案として

現在、日本国内において教科「情報」での教員採用試験が実施されている地方自治体の数は非常に少なく、これまでに10名以上採用された都道府県はわずか10にとどまる。また、1校に1名以上、教科「情報」で採用された教員が配置されているという都道府県は未だ存在していない。これは、とりもなおさず、多くの高等学校で、「情報」の授業を行なうための教科指導力の担保ができていない、ということに言い換えられよう。また、各地でオフィスソフトの操作習得に終始するパソコン教室然とした教科「情報」の授業が展開されていることが広く揶揄されてはいるが、その代替案の提案もまた少ないのも実情であろう。そこで、全国的に教科情報における指導をより充実したものとするために、教科「情報」の専任教員ではない教員にも導入しやすく、実践しやすく、生徒にとっても効果的であろうP検を利用した実践例を披瀝したいと考えた。

2.2 学習指導要領準拠であること

P検協会によれば、今回の実践で利用した学習内容は、出題範囲ベースで「社会と情報」に88%、「情報の科学」に74%、学習指導要領に準拠している。そのため、P検取得に向けた学習を進めることが、学習指導要領に示されている力の定着にも寄与すると考えた。

3. 実践内容

愛知県立瀬戸北総合高等学校では総合学科の特性を活かすため、数多くの学校設定科目を開講している。本実践はその選択科目の中の一つである『情報実務(2単位または3単位、3年生対象)』にP検を導入したものである。対象生徒は全員が1年次に「社会と情報」を履修しており、一定水準の教科「情報」の知識を有している者が多数である。なお、科目の指導計画における目標として、1学期に3級合格、2学期に準2級合格を掲げている。指導に使用した教材は「3級・準2級合格シリーズ(P検協会)」、自動採点機能が搭載された模擬試験プログラムである。

3.1 年間行事計画への組み入れ

検定に合格することが目標であることから、受験日を、指導効果が高く、時間的な制約が強くない時期に設定することに腐心した。定期考査をはじめとする様々な学校行事、上位学校進学に伴う調査書への記載タイミング等を考慮し、平成28年度の検定実施日程は次のようにした。

1学期： 7月19日(火) 終業式前日

2学期： 12月20日(火) 終業式前日

3学期： 3月 7日(火) 高校入試直前

(卒業後のため、希望者のみ)

1・2学期においては長期休業前に三者面談が予定されているため、正課時間帯が午前中のみに変更される。そのため、午後の時間帯に模擬試験プログラムを用いた自習時間や、教員の空き時間を利用した質問可能時間を設け、試験対策を行なうことのできる効果がある。なお、検定不合格者に配付される「再チャレンジチケット」を有効活用したいと考える者には、長期休暇中(8月下旬、1月上旬)を追加日程として提示した。

3.2 評価・評定の算出方法

検定実施日は考査期間と大きく離れているため、成績を算出する時期に指導効果の測定を行なう必

要がある。そこで、1・2学期においては、期末試験週前後に問題順の入れ替え可能な模擬試験プログラムを一斉受検する機会を設け、その結果を成績算出に大きく影響させた。また、3学期においては、1年間の学習の集大成として、3級・準2級の内容を盛り込んだペーパーテストを作成、学年末考査に組み入れて実施し、最終的な評定を算出することとした。

3.3 生徒の反応

昨年度(平成27年度)の最終回の授業において受講生徒に取ったアンケート(回答者33名)によれば、学習したことが可否結果として表出されること、友人と同じ検定を受けるという競争心から、選択科目として自ら希望して受講したという点を差し引いても、概ね好評である。

難易度に関しては、3級の内容について過年度履修している「社会と情報」の内容が臍げながらも記憶に残っていたという者が多く、良い復習の機会として捉える向きが多かった。準2級については、出題内容がより専門的な分野に言及されることもあり、少々消化不良気味という声が多数上がったが、全体として学習した内容に満足したという生徒が9割を超えた。

3.4 実践総括

P検取得のために求められる能力として、タイピング技術・コンピュータに関する一般知識・ネットワーク知識・セキュリティ知識・ICT活用能力が挙げられることから、これを当初の導入背景である「オフィスソフトの操作習得のみに特化したパソコン教室」の代替案としては、大いに有用ではないかと考える。生徒にとっては、P検を取得することで、進学指導の面において、中堅とされる難易度の大学への入試時に優遇されるという付加価値がつくことも肯定的に捉えられるようである。

4. 今後の展望

次の学習指導要領改訂では、大学入試制度改革をはじめ、ドラスティブな変化が起きることが予見される。そこで、以下の2点を今後の展望として挙げたい。

4.1 共通教科「情報」としての現状の底上げ

新科目「情報I(仮称)」を迎える上で、教科「情報」を専門とする教員、全国各地の研究会・学会に足を運ぶ教員は、今後ますます授業改善・充実によりいっそう意欲的に取り組んでいくと考えら

える。

その一方、教科「情報」の専任でない教員にとっては、どうしても本来その教員が担当している教科の授業研究・教材研究にマインドが向きやすく、教科「情報」における授業改善に意識や時間を割くことが難しいというのが現状であろう。学習指導要領や科目名は変わったものの、単に一部のソフトウェアの活用の仕方を中心に教えるだけの授業も少なからず生き残る、という危惧はまだまだ拭えないものとして存在し続けよう。このような教科「情報」の専任でない教員にとっては、P検合格に向けた指導を行うことが、単なるソフトウェア活用を教えるだけの授業を、より学習指導要領で求められる力をつける授業に押し上げる上で有効であると推察される。

なぜなら、P検では前述のようなICTを活用した問題解決能力(プロフィシエンシー)や教科書に掲載されている内容の知識・理解の力も測定しているためである。P検を利用した授業実践を推し進めることで、単なるソフトウェアの活用法にとどまるのではなく、幅広く教科「情報」で求められる力を身に付けさせやすくなることが期待されるからである。

4.2 高大接続改革に活用される可能性

既に、他教科においては、将来的に民間企業の外部試験が大学入試に活用される方向で議論が進んでいる。その要因のひとつに、英語のスピーキング能力など、短期間に多くの受験者の採点・評価を行なうことが難しい能力が求められてきていることが挙げられる。現行の試験形式では実現が難しい場合に、外部試験を利用するというケースは、必ずしも上述の英語だけではなく、他教科においても起こりうる可能性があるのではないだろうか。

殊、教科「情報」においては、大学入試教科としての歴史が浅く、高大接続改革への柔軟な対応として外部試験が活用されることも大いに考えられる。近い将来、そうなった場合の、先行実践・提言になることを願ってやまない。

参考文献

- (1) 文部科学省 教育課程部会 情報ワーキンググループ 議事要旨・議事録・配付資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/059/giji_list/1364461.htm